

青江舜二郎編

未来一幕劇シリーズ17

青年演劇一幕劇集

【第三集】

未来社刊

青江舜二郎編

青年演劇一幕劇集【第3集】

未来一幕劇シリーズ17 未来社刊

本書に収録した作品の無断上演を禁じます
上演の際はかならず未来社にご連絡下さい

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

青年演劇一幕劇集 第三集

【未来一幕劇シリーズ 17】

一九六二年二月二五日 第一刷発行
一九七六年四月一五日 第五刷発行

定価 五五〇円

編者 青江舜二郎

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三―七―二

振替・東京 七―八七三八五番

電話代表 〇三(八四)五五二一番

本文印刷 萩原印刷

装本印刷 広陵

製本 五十嵐製本

(落丁・乱丁本はおとりかえします)

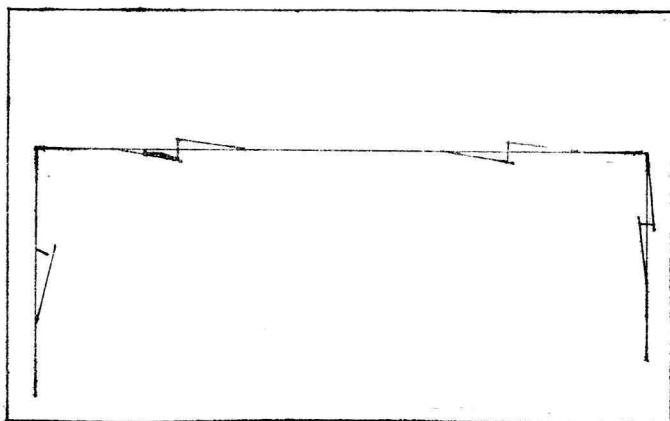
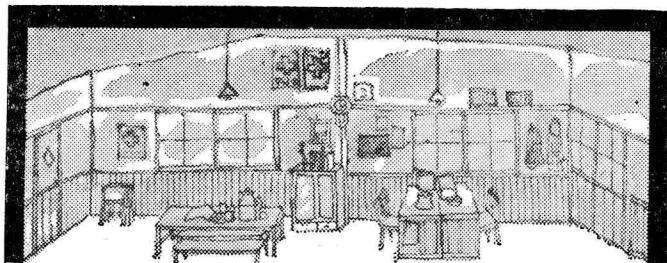
青年演劇一幕劇集 第三集 目次

一つの命……………	岡野奈保美……………三
常念よ さようなら……………	神垣三津子……………三
わかれ……………	早坂久子……………七
帰省……………	古林功……………七
みみずと礫……………	藤田保平……………二五
富樫……………	野口達二……………二五
編集を終えて……………	青江舜二郎……………一八

一
つ
の
命

岡野奈保美

キャスト	
川田 みね	(工員・五〇才)
和子	(その娘・バスガイド・二二才)
雪 江	(事務員・二五才)
堀 田	(工員・四〇才)
治 郎	(工員・二〇才)
少 年	(新聞配達・一六才)
男 A	(学生・二〇才)
B	(サラリーマン・三〇才)
女 A	(主婦・三五才)
B	(〃・三〇才)



時 現代。秋。

所 ある小都市。

舞台。小さな旋盤工場の中の事務室。ここは工員達の食堂兼休憩室であり、応接室でもある。上手奥に、工場に通じるガラス戸。正面上手よりと、下手奥に窓。下手手前に出入口。正面上手よりは壁。柱時計、風景写真入りのカレンダー、仕事の予定を書きこんだ小黒板が、かけてある。窓の側に事務員用と社長用の机と椅子が向い合って二脚。社長用の机の上には、電話、帳簿等。事務員用の机の上には、帳簿、算盤等。そして金魚鉢の中に金魚が二匹。下手より工員用の長椅子が、細長い白木のテーブルをはさんで二脚。テーブルの上に、魔法瓶ときゅうす、湯吞茶碗、菓子のをせた盆が、新聞紙をかぶせて置いてある。下手の角に、客用の折りたたみ式の腰掛が五脚ばかり重ねてあり、そのそばに木箱に入った製品が少し並べてある。

日曜日、三時近く。

工場から旋盤の音が、まばらに聞える。舞台には誰もいない。下手のドアが静かに開いて、雪江が中をうかがいながら疲れた足取りで登場。上手、工場の方に行きかけるが、ふと足をとめて事務員用の机の前に力なく腰をおろす。机の上に肘をついて金魚鉢の中を見ながら、しばらくじっと物思いに耽っているが、やがて立上り、旋盤の音を気にかけながら、そっと外へ出て行く。

間。

旋盤の音、突然やむ。

上手のガラス戸を開けて、堀田と治郎、作業服姿で濡れた手を手拭でふきながら登場。

堀田、長椅子にどっかり腰をおろす。治郎、閉めきつてある正面のガラス窓を開き、大きく深呼吸する。

堀田 (腰掛けたまま工場の方をのぞきこんで) みねさん！ こっちへ来てお茶にしませんか。……みねさん！

返事無し。

堀田 しょうがないな。…… (盆の上の新聞紙を広げたまま横にほおって、きゅうすに湯を注ぐ)

治郎 (窓のそばに立ったまま) 何してるの？ おふくろさん。

堀田 動かないんだ。機械の前にぼんやりしゃがみこんで……。

治郎 無理もないよ。今日で初七日だもの。……満さんのこと、思い出しているんでしょう。

堀田 まあね。……しかし、息子のようなわけにはいかないな。どんなに熱心に働いてみたところで。

……年が年だからな。

(堀田、自分の分だけ湯呑に茶をついて、いっきに呑みほす。

堀田 (社長用の机の方に目をやって) 社長一家は旅行だし、今日も又この工場には二人だな、治郎。

……みねさんがいるから三人か。

治郎 日曜だもんな。

堀田 遊びたい者は休む。俺のように金の欲しい者、お前のように休んでもあてのない者は働く……。

治郎 (堀田の言葉苦笑して聞くが、思いついたように) そうだ、同じだ。堀田さん、同じこと言っ

たよ、あの日も。……俺と二人きりで機械に向って。(柱時計を見上げて) 今頃は、ほら、二人とも

警察で、さんざん、満さんのことを聞かれて疲れきって外に出ていたっけ、……一週間前の今日。

堀田 (菓子をつまんで食べようとして) そう大きな声を出すなよ。みねさんが隣にいるじゃないか。

治郎 (急に声を小さくして、社長用の椅子によりかかりながら) あの日、ここに来て見たら、いつも

早い満さんが、まだなもんで、珍しいこともある、なんて言いながら二人で仕事を始めたでしょう。と

ころが何時になっても来やしない。「雪江さんとデートかな」なんて言い出した頃、警官が入って来て

俺達は警察につれて行かれて、満さんが殺されたことを知った。……あの時の驚きったら。あんな善い

人が！……。

堀田 そこで、いろいろと聞かれたことを俺達は答えた。それだけだよ。(湯呑みに茶を注ぐ)

治郎 そう。たしかに……。だけど夕刊を見たら、俺達の言ったことが、まるで、そのまま……。

堀田 俺だって驚いたよ、実際。……しかし、考えてみると警察だって、ああ発表するしかなかったの

さ。何しろ、犯人は誰だか見当がつかない。見た人は誰もいないんだから……。母親のみねさんも、妹の

和ちゃんもハイキングに出かけて留守。俺達に聞く以外に手はない。……聞くことといえば「女関係

は？」……そこで俺達は、知っていることを言わないわけにはいかなかった。雪江ちゃんのことを

ね。あの人の前にやってたことだって、ああしつこく質問されては、言うよりほか仕方なかったろう？

治郎 でも、俺、この一週間、おふくろさん、和子ちゃん、雪江さん、三人の様子を見てると、……

だんだん悪いことをしてしまったように思えて。……もし、雪江さんのこと言わなければ、新聞にだって、あんなに大きく出なかったろうし、……満さんも、あんなふうに書かれなかったろうから。

堀 田 おい、あんまり気にかけるのはよして、お茶でも呑めよ。そんな所につつ立ってないで……。治郎、覚えてるだろう？……満ちゃんが、雪江ちゃんを社長の所へ連れて来た時のこと。俺達はどこで弁当を食べていたから、みんな、聞いてしまっただろう？

治 郎 ええ。あの時社長に聞かれたもので、満さん「過去のことは気にして貰っては困ります」って断ってから、前にこの近くの有名なボスに養われていたことを言ってたよ。中学当時の同級生で、今は恋人だということもね。……そしてこの事務には非使ってもらいたいと……。

堀 田 誰でも知っているよ、この工場の者は。十人足らずの工員がみんな揃っていたんだから、あの時は。……それから、ちよいちよい変な男が（事務員用の机を指して）そこで事務をとっている雪江ちゃんを、外からうかがっていたことだって……。俺達はそれだけしか言わなかったんだからな、警察で……。そのくらいしか心当りも無かった。

治 郎 しかし。（社長の椅子に反対から腰掛けて）「恋人某が、元、この辺のボス某の女で、その子分がその後も彼女を追いかけたらしく、その一味の者と、喧嘩して刺されたらしい」だなんて、でかかかと、いくら新聞だって、あんまり……。

堀 田 結局、当然ずとも遠からずじゃないか。一昨日の新聞に出ていただろう、犯人が捕って自白したのが。女のことで因縁つけられたからだと言ってたじゃないか。

治 郎 だって、全然雪江さんは知らない人だと言ったでしょう？ あの人過去のとは関係なかったんでしょう。

堀 田 やくざと見れば雪江ちゃんを追いかけている者だと普段思いこんでいたんじゃないかね。だか

ら、知らない奴にまで因縁つけて、殺されるような憂目に逢わなきゃならなかったんだ。

治郎 そうかなあ……。

治郎、立上り、テーブルのそばに歩みより、きゅうすに湯をさして、堀田の向いの長椅子に腰をおろす。湯呑茶碗を一つ自分の方へよせて、きゅうすを持ち、茶を注ぐとする。何気なく開いたまま放つてある古新聞に目を通し、思わずきゅうすをテーブルに置く。

治郎 深井さんが刺殺される写真じゃないか、市長候補が、少年に……。生々しくってお茶どころじゃない。

堀田 気にせんことさ。たかが古新聞を。

この時、下手の窓から和子の顔がのぞき、急ぎ足に出入口より登場。バスガイドの服装で帽子はかぶらず上衣は腕に持っている。

和子 (室の中を見まわして) 雪江さんは？……。雪江さん来なかった？

堀田 ……さあ。(上手の方にあごを向けて) 工場にいたもんだから。

治郎 何か用？ 来たら顔を出すでしょう。工場の方にも。

堀田 和ちゃん、もう仕事終ったの？ 今日……。

和子 ええ、今。……本当に雪江さん、まだ？

堀田 今日は休みだろう、日曜だもの。

和子 仕事じゃないの、あの人。……兄さんのことで一寸。……どうしたのだろう。もう来てもいい時間なのに。……あ、母さん、来てるでしょう？

治郎 ええ、工場に……。 (堀田と顔を見合せて) 俺、連れて来るよ。

和子 (治郎の様子から察して) まだ、母さん、仕事も手につかないでしょう？……働き出してから、四日しかたつてないんだもの。……私が行くわ。

和子、上手工場の方へ退場。

治郎 満さんのことだつて？

堀田 和ちゃんは、この一週間、兄さんのことで、ずいぶん騒ぎ歩いているようだよ。……悲しいのなら、落着いているのが本当だろうに。

堀田、タバコに火をつけて長椅子の上にごろりと横になる。

治郎、きゆうすに入れたままになっていたお茶を湯呑について、何か考えるような顔で静かに呑む。そして、古新聞の写真にもう一度、今度は、ゆっくりと眼を通す。

治郎 (小さく) 和子ちゃんだつて、悲しみを堪えているんだ。仲のいい兄妹だったもの。

上手より和子、母のみねを伴って登場。みねは、モンペ姿に白い手拭をかぶっている。息子を失った悲しみにやつれた表情にどこか女一人で生きて来た芯の強さが感じられる。

和子

母さん。日曜にまで働かなくとも、家にいればいいのに。

みね

部屋でばかんとしていると、満の写真が目に入って仕方ないよ。こうして働いていけば何とか……。

和子

同じだわ、ここに來たって。……今だってあの機械の前で兄さんのこと、考えていたのでしょう？

堀田、起きあがってみねに椅子を勧める。みね、それに気づかず立ったまま。

みね

そうだよ。思い出していたんだ。あの子のこと、父さんのこと……。

和子

（それにはかまわず）母さん。もう一人、見つけたのよ。誰かがもう一人。

治郎

もう一人って？

和子

雪江さんが今朝、警察に呼ばれて行ったのよ。あの事件に関係したらしい男が來ているからあの人の知っている人かどうか、見てほしいとね。私が朝、お客さんに乗せてあすこを通ったら、ちょうど雪江さんが中に入るところだったわ。急いでバスを止めてもらってその後を追いかけたら、あの人、午前中で済むらしいから、ここに來ていると言ったの。……でも遅いのね。

みね

どうせ犯人の片割だろうよ。一人に殺されても、二人に殺されても、あの子は死んじゃったんだ。……苦労して育てたあの子は。

和子

新聞にあんなに派手に書かれてね。ちんぴらと殺し合いをしたみたいに。……でも、私は信じられないの、どうしても。あの犯人の自白だってそう。……だから、もう一人犯人なり、誰なり現われれば、もっと違った事実がはっきりするかも知れないと、望みをかけているんだわ。……私、この一週

間、新聞社っていう新聞社を、ほとんどまわって、「真実かどうかははっきりしないことを興味本位に仰々しく書くのを止めて下さい」って言って歩いたのも、あれが兄さんの死に方とは思いたくないから……。

治郎

本当に俺、満さんは、立派な人だったと思う。……あの人は一生懸命働いて、将来は自分で旋盤工場を持つのだって言ってたね。俺達は他の仕事が無いもんだから仕方なしに旋盤工になったのに。……あの人は旋盤の仕事に誇りを持っていたんだ。

みね

あの子の父が、小さな旋盤工場を持っていて、私とあの人が働いている中で生れて育ったんだ。……だけど、あの子は、私の願ったようには成長しなかった。

治郎

（木箱から製品を一つ手に取って）俺なんか、こんな鉄を円くするだけの仕事、まったくつまらないと思うよ。ただただ同じことのくりかえしだもの。……満さんは、これをこうして手に取って「この仕事をやる人がいなければ、機械という機械は、動かないじゃないか」……あの人の仕事は、そんな言葉を裏づけるように、いつも手がゆきとどいていた。

堀田、タバコをくわえたまま話を聞いている。

和子

私にだって本当に良い兄さんだった。思いたすわ。……私がまだ小さい頃、知らない子に苛められてゐるのを見て、兄さん遠くから走って来て助けてくれた。そしてその子と私の手を握らせて、二人を友達にしてくれたわ。学校時代、遅くまで私の勉強の相手をしてくれて、偉かった父さんの話をしてくれたわ。

みね

父さんの話……。

堀田

人間には表があれば裏もある。たしかに彼は表が立派すぎたね。

治郎

堀田さん！ それはあんまりだよ。一緒に働いた満さんに対して。

和子

堀田さんは、兄さんの、どんな裏を見たというの？　どんな！

堀田

そうむきになられては困るよ。（笑って）俺には、新聞社に怒鳴りこむほどの自信は無いというだけさ。

みね、長椅子に腰掛けて考えこんだまま黙っている。

治郎

（置いてある古新聞を指し）俺、この新聞見て思い出したんだよ、さっき。……丁度ほら、この新聞が配達になった朝、満さんが言ったでしょう。「市長候補のこの人が公衆の面前で演説をしていたのなら、刺される前に後から止める人はいなかったろうか、それは出来ないことだったろうか」って。あの時満さんはとても悲しそうだったよ。……あれは満さんが殺される四日前のことだった。

和子

兄さんは暴力を憎んでいたのよ、何よりも。それは兄さんにしてみれば当然のことなのよ。

みね

（強い語調で）これまで苦勞して育てたのは死なせるためじゃない。誰かに殺させるためじゃない。……あの子にも責任は有るんだ。……母親の私の言うことなど少しも聞き入れずに生きようとしたから。父さんのように……。

正面の開けはなされた窓の側を、学生服を着た男Aとサラリーマンの男Bが通りがかり立止る。

男A

（中を指して）たしか、ここの工員だよ。有名なボスの妾を恋人にしたために、不良に因縁をつ